

イザヤ書13-14章「バビロンの破滅」

1A 軍隊の召集 13

1B 主の日 1-16

1C 諸国の軍隊 1-5

2C 全能者からの破壊 6-16

1D 陣痛の苦しみ 6-8

2D 世への罰 9-12

3D 免れない怒り 13-16

2B メディヤ人 17-22

1C バビロンの崩壊 17-18

2C 永久の廃墟 19-22

2A 永久の滅び 14

1B ヤコブの憩い 1-2

2B 嘲りの歌 3-23

1C 虐げる者 3-8

2C 下界の陰府 9-11

3C ルシファー 12-15

4C 投げ出される屍 16-23

3B 打たれるアッシリヤ 24-32

1C 主のご計画 24-27

2C 殺されるペリシテ 28-32

本文

私たちはイザヤ書 13 章から読みます。前回、私たちは主が終わりの日に、救いをご自分の民に与えられるところを読みました。イザヤに与えられる神の幻は、エルサレムとユダから北イスラエルへと広がっており、そこでアッシリヤの侵略から救い出されることを神は約束されました。その救いは、エッセイの根とも呼ばれ、若枝とも呼ばれるキリストご自身です。この方が御霊によってこの地上を歩まれ、この方の裁きによって平和が世界に満ちます。そして散らされていたユダヤ人、神の選びの民を神が集めてくださいます。そしてイザヤと、残された民は、神こそが私たちの救いであると賛美するのです。

そして 13 章から 20 章まで、イスラエルを越えて周辺の諸国にまで及びます。バビロン、ペリシテ、モアブ、ダマスコ、クシュ、そしてエジプトに対する宣告へと移ります。そして、その間に、何回か、この預言を聞いているユダヤ人に差し迫るアッシリヤの脅威へと近未来へ預言が戻ります。これらに対する預言は、神の裁きです。主は確かにイスラエルを選ばれ、イスラエルが神に聞き従

わないので裁かれますが、周囲の国々もイスラエルとの関係において、神の啓示を受けています。それでも応答しない彼らに対して裁かれるのです。一般の人々も、キリスト者と教会の証しを聞くことによって、神の裁きから免れることはないことを知る必要があります。

1A 軍隊の召集 13

そして周囲に対する裁きは、バビロンから始まります。ここでイザヤが預言しているのが、アハズの治世であったことを思い出してください。紀元前 730 年辺りです。その時にバビロンは、確かにアッシリヤの抵抗勢力として台頭していましたが、何でもない国でした。バビロンが台頭するのはずっと後、紀元前 605 年以降です。イザヤはこれからバビロンが滅びることを預言しますが、崩壊どころか、大国として台頭さえしていない状態です。

それではなぜ、ここでイザヤがバビロンを他の周辺国に先じて預言しているのかと言いますと、これは 11-12 章の続きだからです。11 章から 12 章にかけて、主は、アッシリヤを滅ぼされることを約束しながら、残りの民にとっての救いの完成、つまりキリストの到来を約束したからです。この方が現れて、神の国が地上に立てられて、それで神の怒りが去るということを神は約束されました。そこで、アッシリヤが倒れるのは近未来に起こりますが、神が終わりの日にはバビロンを倒されるので、このように終わりの日の裁きを預言しているのです。

バビロンは、ネブカデネザルが紀元前 605 年に治世を始め、そしてユダの国からその民を捕え移す、バビロン捕囚を始めた国です。597 年にも行ない、586 年にエルサレムの神殿を破壊して、ユダの民は完全に捕え移されました。しかし 539 年に、ベルシャツアルが王であった時にメディア・ペルシヤ連合軍がバビロンの町に突入し、それで滅んだ国であります。ですから、バビロンは神に選ばれた民とその都エルサレムによっては、アッシリヤ以上に自分たちを虐げ、自分たちを根こそぎ約束の地から取り上げたところの国であることから、神はバビロンに究極の滅び、裁きを宣言しておられます。

そしてこの歴史的出来事以上に、バビロンは実は人間の歴史の初めから終わりまで、神に反抗する都として登場します。ノアの時代の洪水の後、人々が世界に満ちなければいけないところ、人々はシヌアルの平地に留まり、そこに煉瓦で家を建て、アスファルトで壁を塗り、そして町々を建てました。主の前にへりくだって生き、主の言われた通りに地に満ちなければいけないところ、彼らは神に反抗して、自分たちで安全を確保しようとしたのです。それだけではありません。「創世 11:4 さあ、われわれは町を建て、頂が天に届く塔を建て、名をあげよう。われわれが全地に散らされるといけないから。」天におられる神を認めず、自分たちが天に届き、自分たちが名をあげる、つまり神のようになろうとしたのです。そして、地に満ちよと命じられた神に反抗して、散らされてはいけないと言いました。これがバベルの塔と呼ばれます。これがバビロンの発祥であり、神に頼らず、自分たちで安全を確保し、そして神をあがめず自分たちの努力で神に取って替わろうとし、そして天体を拝む、つまり偽りの宗教を始めることをしました。この背後に、午前礼拝でお話したサタ

ンの力が働いています。

これが世の始まりに起こったことですが、世の終わりにバビロンが存在します。バベルの塔は聖書の初め創世記 11 章に書かれています、終わりの日のバビロンは聖書の終わり、黙示録 17-18 章に書かれています。「また、七つの鉢を持つ七人の御使いのひとりが来て、私に話して、こう言った。「黙示 17:1-5 ここに来なさい。大水の上にすわっている大淫婦へのさばきを見せましょう。地の王たちは、この女と不品行を行ない、地に住む人々も、この女の不品行のぶどう酒に酔ったのです。」それから、御使いは、御霊に感じた私を荒野に連れて行った。すると私は、ひとりの女が緋色の獣に乗っているのを見た。その獣は神をけがす名で満ちており、七つの頭と十本の角を持っていた。この女は紫と緋の衣を着ていて、金と宝石と真珠とで身を飾り、憎むべきものや自分の不品行の汚れていっぱいになった金の杯を手を持っていた。その額には、意味の秘められた名が書かれていた。すなわち、「すべての淫婦と地の憎むべきものとの母、大バビロン。」という名であった。」雅歌で学んだように、神とイスラエル、また神と教会の関係は婚姻関係に喩えられています。ここでは、神との関係において最も不貞な関係、地上の王たちと不品行を犯し、世の富を集めている大淫婦に喩えられています。そしてこの大きな都バビロンが、神によって裁かれることが預言されています。そしてキリストの再臨が来ます。

したがって、この世の始まりから終わりまで、かつてユダの民を虐げたバビロンのような、神の民を虐げ、奴隷とする、この世の霊が働いているということであり、バビロンというのは、言い換えればこの世への愛であり、偶像であります。そして、この世と世の欲が滅び去ること、これがイザヤ書 13 章と 14 章に貫かれている原則です。

1B 主の日 1-16

1C 諸国の軍隊 1-5

13:1 アモツの子イザヤの見たバビロンに対する宣告。13:2 はげ山の上に旗を掲げ、彼らに向かって声をあげ、手を振って、彼らを貴族の門に、はいらせよ。13:3 わたしは怒りを晴らすために、わたしに聖別された者たちに命じ、またわたしの勇士、わたしの勝利を誇る者たちを呼び集めた。13:4 聞け。おびたしい民にも似た山々のとどろきを。聞け。寄り合った王国、国々のどよめきを。万軍の主が、軍隊を召集しておられるのだ。13:5 彼らは遠い国、天の果てからやって来る。彼らは全世界を滅ぼすための、主とその怒りの器だ。

これは、紀元前 539 年、バビロンの最後の王ベルシャツアル王が大宴会を催している時のことを示しています。ダニエル書 5 章に書かれています。その時、クロス率いるメディア・ペルシヤの連合軍がバビロンの町に侵入しました。ここで「貴族の門にはいらせよ」と書いているのは、その為です。彼らが宴会で酒に酔い、へでれけになっているとき、宮殿の中にメディア人が入ってきました。そして主は、その軍隊を「わたしに聖別された者たち」と呼ばれています。前回の学びにおいても、アッシリヤが北イスラエルを滅ぼす時に、主がアッシリヤをイスラエルに対する怒りの器とし

て用いられたことが書かれていましたが、同じようにメディア・ペルシヤの連合軍が、バビロンを滅ぼすための器として用いられているということです。

しかし、この預言はそれだけではありません。「彼らは遠い国、天の果てからやって来る。」と言っていますが、バビロンにとってメディアとペルシヤは遠い国ではありません。ここで言っている、寄り合った王国、国々のどよめきは彼ら以上のことを話しています。「全世界を滅ぼすための、主とその憤りの器」と言っているところで明らかです。黙示録 17 章にある大淫婦のことです。その淫婦が乗っていた獣が、十人の王と共に彼女を荒廃させるようにさせる、とあります。「17:16-17 あなたが見た十本の角と、あの獣とは、その淫婦を憎み、彼女を荒廃させ、裸にし、その肉を食い、彼女を火で焼き尽くすようになります。それは、神が、みことばの成就するときまで、神のみこころを行なう思いを彼らの心に起こさせ、彼らが心一つにして、その支配権を獣に与えるようにされたからです。」獣は、反キリストのことです。反キリストがまとめる世界の軍隊が、この大きな都に嫌悪を抱き、それで都を滅ぼしてしまうということです。バビロンは偽りの宗教の世界の集合体でもありますが、反キリストはそれを忌み嫌い、自らを神とする獣の国を立てます。

2C 全能者からの破壊 6-16

1D 陣痛の痛み 6-8

13:6 泣きわめけ。主の日は近い。全能者から破壊が来る。13:7 それゆえ、すべての者は氣力を失い、すべての者の心がしなえる。13:8 彼らはおじ惑い、子を産む女が身もだえするように、苦しみと、ひどい痛みが彼らを襲う。彼らは驚き、燃える顔で互いを見る。

「主の日」の宣言です。これは神の定めておられる、全能者からの破壊の日です。旧約時代の預言者は、何度も何度も主の日を預言しました。そして新約聖書にも、使徒たちも主の日を語っています。イエス様もオリーブ山で、弟子たちにこの日が来ることを教えられました。ルカ 21 章 25 節からです。「ルカ 21:25-27 そして、日と月と星には、前兆が現われ、地上では、諸国の民が、海と波が荒れどよめくために不安に陥って悩み、人々は、その住むすべての所を襲おうとしていることを予想して、恐ろしさのあまり氣を失います。天の万象が揺り動かされるからです。そのとき、人々は、人の子が力と輝かしい栄光を帯びて雲に乗って来るのを見るのです。」私たちキリスト者は、この日が来ることを思って、主を畏れかしこんで生きなければいけません。使徒ペテロが言いました。「2ペテロ 3:11,14 このように、これらのものはみな、くずれ落ちるものだとすれば、あなたがたは、どれほど聖い生き方をする敬虔な人でなければならないことでしょう。…そういうわけで、愛する人たち。このようなことを待ち望んでいるあなたがたですから、しみも傷もない者として、平安をもって御前に出られるように、励みなさい。」

そしてここには、「子を産む女が身もだえするように、苦しみ」とあります。どうしようもない、助けようもない苦しみです。このことを踏まえて、使徒パウロがテサロニケの人たちに書きました。「1テサロニケ 5:2-3 主の日が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知してい

るからです。人々が『平和だ。安全だ。』と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。」紀元前539年、ベルシャツアル王は楽しんで、歌っている時に突如として襲撃に遭い、彼は殺されました。同じように、主の日は突如として襲いかかります。平和である、安全であるという安逸、このような慢心が最も靈的に危険であるということが出来ます。

2D 世への罰 9-12

13:9 見よ。主の日が来る。残酷な日だ。憤りと燃える怒りをもって、地を荒れすたらせ、罪人たちをそこから根絶やしにする。13:10 天の星、天のオリオン座は光を放たず、太陽は日の出から暗く、月も光を放たない。13:11 わたしは、その悪のために世を罰し、その罪のために悪者を罰する。不遜な者の誇りをやめさせ、横暴な者の高ぶりを低くする。13:12 わたしは、人間を純金よりもまれにし、人をオフィルの金よりも少なくする。

なぜ主は、このような恐ろしい日、残酷な日を与えられるのか？それは、悪のために世を罰するためです。主はこのことを、何度か既に人間の歴史の中で行われました。例えば、ノアの時代の洪水です。生きているものを全て水で消し去られました。ソドムとゴモラもそうでしょう。火と硫黄によって滅ぼされました。それは、人々が悪いことに傾いたためであり、主は忍耐深い方であり、怒るに遅い方ですが、悪を罰せず野放しにすることはありません。神の怒りは、聖書全体に啓示されている大きなテーマであり、決して私たちがないがしろにしてはいけない内容です。

そして神の福音は、この曲がった世から私たちを救い出してください。私たちが罪を悔い改め神に立ち返る時に、神はキリストの血によって私たちの罪を豊かに赦して、聖霊の賜物を与えてくださいます。ペテロは悔い改めた人々に対して、「この曲がった時代から救われなさい。(使徒 2:40)」と励ましました。パウロは言いました。「ガラテヤ 1:4 キリストは、今の悪の世界から私たちを救い出そうとして、私たちの罪のためにご自身をお捨てになりました。」ロトが、ソドムの町から出ることによってその裁きから救われたように、主は私たちを地上から引き上げ、この世から引き出すことによって、悔い改め、主の前に歩む者たちを大患難から救い出してください。

3D 免れない怒り 13-16

13:13 それゆえ、わたしは天を震わせる。万軍の主の憤りによって、その燃える怒りの日に、大地はその基から揺れ動く。13:14 追い立てられたかましかのように、集める者のいない羊の群れのように、彼らはおのおの自分の民に向かい、おのおの自分の国に逃げ去る。13:15 見つけられた者はみな、刺され、連れて行かれた者はみな、剣に倒れる。13:16 彼らの幼子たちは目の前で八裂にされ、彼らの家は略奪され、彼らの妻は犯される。

バビロンは帝国ですから、そこには数多くの国民がいました。それで、その都が滅びる時にそれぞれの国に逃げ去ろうとしますが、敵に見つけられた者たちは無残に殺され、略奪され、そして凌

辱されます。そしてこれは、神なしで安心していただけの者たちの行き着く先になります。主から離れているのですから、休まる場所はないのです。逃げようとしても災いは追いつきます。

2B メディア人 17-22

1C バビロンの崩壊 17-18

13:17 見よ。わたしは彼らに対して、メディア人を奮い立たせる。彼らは銀をものともせず、金をも喜ばず、13:18 その弓は若者たちをなぎ倒す。彼らは胎児もあわれまず、子どもたちを見ても惜しまない。

古代バビロンを滅ぼすのは、メディア・ペルシヤ連合軍ですが、メディア人がバビロン人にどのようなことをするのかを教えています。バビロンの富によって、その金銀によって彼らの怒りを宥めることはできませんでした。金銭で自分の安全を確保していると思っている者は、後でひどい目に遭うということです。

2C 永久の廃墟 19-22

13:19 こうして、王国の誉れ、カルデア人の誇らかな栄えであるバビロンは、神がゾドム、ゴモラを滅ぼした時のようになる。13:20 そこには永久に住む者もなく、代々にわたり、住みつく者もなく、アラビヤ人も、そこには天幕を張らず、牧者たちも、そこには群れを伏させない。13:21 そこには荒野の獣が伏し、その家々にはみみずくが満ち、そこにはだちょうが住み、野やぎがそこにとびはねる。13:22 山犬は、そのとりで、ジャッカルは、豪華な宮殿で、ほえかわす。その時の来るのは近く、その日はもう延ばされない。

バビロンは滅ぼされたら、火と硫黄によって滅ぼされたゾドムとゴモラのようにになります。つまり、人の住まないところとなります。しかもその無人地帯は永久に続くことがあります。その様子は、まるで放射能汚染を受けた町のようなです。野生の動物のみが棲息することになります。そして、遊牧をするアラビヤ人でさえ、そこを歩かないようになります。黙示録 18 章には、「18:2 倒れた。大バビロンが倒れた。そして、悪霊の住まい、あらゆる汚れた霊どもの巣くつ、あらゆる汚れた、憎むべき鳥どもの巣くつとなった。」とあります。興味深いことに、今のバビロンの遺跡の所に遊牧民は確かに寄り付かないそうです、悪霊がいるから、ということらしいです。

ですから古代バビロンにおいてその廃墟を見るのですが、しかしこれはバビロンの都が滅んで、何世紀もかけて起こったことでした。ペルシヤの王クロスは、この都をそのまま使いましたし、ギリシヤの王アレクサンドロスも使いました。廃墟となるのはその何百年も後です。しかし、ここで描かれているバビロンは、突如の破滅によってこのようになります。これは終わりの日に、終わりの日のバビロンに起こることです。永久の虚空であります。主による滅びは、永遠に定められた滅びです。死後に、セカンドチャンスはありません。永遠に裁かれているのです。

2A 永久の滅び 14

1B ヤコブの憩い 1-2

14:1 まことに、主はヤコブをあわれみ、再びイスラエルを選び、彼らを自分たちの土地にいこわせる。在留異国人も彼らに連なり、ヤコブの家に加わる。14:2 国々の民は彼らを迎え、彼らの所に導き入れる。イスラエルの家は主の土地でこの異国人を奴隷、女奴隷として所有し、自分たちをとりこにした者をとりこにし、自分たちをしいたげた者を支配するようになる。

主が、バビロンを滅ぼされ、その後に来た安息を約束しておられます。主が、天の果てに散らされたユダヤ人たち、そして諸国の民に虐げられていた彼らを解放し、イスラエルに帰還することができるようにしてください。それは、主イエス・キリストが再来される時に実現します。今現在、イスラエル国が、世界で迫害を受け、苦境の中にいるユダヤ人が帰還して、彼らを吸収していますが、これは主が戻って来られることの前兆であります。そして、「主はヤコブをあわれみ、再びイスラエルを選び」と言っていますが、一度、選んだけれども見捨てて、それで再び選んだという意味ではありません。英訳では、still すなわち「なおのこと続けて」とあります。ですから主は彼らを憐れんで、ご自分の選びに基づいて行動に移された、ということです。

そして、バビロンによって神の民が苦しんだように、この世の制度の中でキリスト者は苦しみます。一見、迫害を受けていないように見えますが、目に見えない悪の勢力は確実に、キリスト者の信仰を無きものにしようとしています。キリスト者の告白と証しをもって生きる、教会として集まり主を礼拝すること自体、いとも簡単に、普通の日本人の生活に戻って、それでもって”隠れクリスチャン”のようにして生きているようにさせています。全く自由であるはずの日本で、江戸時代の激しい迫害の中にあつた「隠れキリシタン」の名前をそのまま使っているとは、非常に由々しいことです。どれだけ日本に、信仰を押しつぶす目に見えない力が働いているかを物語っています。

そこでテサロニケ人への手紙第二の言葉を覚えたいと思います。「1:4-7 それゆえ私たちは、神の諸教会の間で、あなたがたがすべての迫害と患難とに耐えながらその従順と信仰とを保つことを、誇りとしています。このことは、あなたがたを神の国にふさわしい者とするため、神の正しいさばきを示すしるしであって、あなたがたが苦しみを受けているのは、この神の国のためです。つまり、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現われるときに起こります。」今は、迫害と患難に信仰によって耐えているけれども、主がその苦しみの後に安息を与えてくださる、ということです。ユダヤ人がバビロンを始めとする諸国の民からの迫害を受けたけれども、最後には安息の地が与えられるように、私たちにも神の御国に入るといふ安息が苦しみの後に与えられるのです。

ここに、「在留異国人」の存在も出てきます。主は元々、ユダヤ人に土地を与えるように定められ

でも、在留異国人を排除するような目的はありませんでした。彼らがエジプトにいて外国人であったのだから、むしろ彼らを虐げてはいけないと命じています。そして、ヤコブの家に加わるとあるように、彼らもイスラエルの共同体の中に入って、神を礼拝するのです。そして、「国々の民は彼らを迎え、彼らの所に導き入れる。」とあります。これは興味深いですが、ユダヤ人たちのほうが後発隊のようです。主イエス・キリストが戻られて、神の国を立てられるのですが、まず諸国の民が自分たちの国にいる、選びの民ユダヤ人が帰還できるように全面的に支援することが、他のイザヤ書の預言に書いてあります。そしてエルサレムにも主を信じる諸国の民が多く集まっていて、それで帰還する新生したユダヤ人たちを迎え入れるという流れです。

そして、イスラエルの民が異国人たちを奴隷にして、虐げた者たちを支配するとあります。けれども、気をつけなければいけないのは、ここで異国人たち本人がそのことを望んでいるということです。この「奴隷」とか「支配」という言葉はとても否定的な意味合いがあるので誤解されやすいですが、主の土地において回復したイスラエルの下で働き、支配を受けるとすることは、主ご自身の豊かな祝福と自由を受けることに他なりません。彼らがかつてユダヤ人を虐げたように、ユダヤ人が仕返しで虐げるわけではありません。むしろ、主によって憐れみを受けたユダヤ人が、主に仕えていく中で、その与えられた恵みを自分の下にいる人々に分け与えていく、ということです。イエス様が山上の垂訓で、「柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。(マタイ5:5)」と宣言されました。その支配はへりくだった者が支配する支配であり、横暴な神を知らない支配者のような支配ではありません。

神の恵みを受けた、選ばれた者の下にいることは、幸せであり、祝福を受けることです。その第一人者はキリストご自身です。神に選ばれた方であるイエス様の下にて、この方の僕となり、支配を受けることほど、神の祝福を受ける栄誉ある地位はありません。そして、このキリストにあって選びを受け、恵みを受けている人々の下にいることも、自分も同じようにキリストから恵みを受けて祝福を受けていますが、それでもそうしたキリストに付く人々の中にも幸せなのです。

2B 嘲りの歌 3-23

1C 虐げる者 3-8

14:3 主が、あなたの痛み、あなたへの激しい怒りを除き、あなたに負わせた過酷な労役を解いてあなたをいこわせる日に、14:4 あなたは、バビロンの王について、このようなあざけりの歌を歌って言う。「しいたげる者はどのようにして果てたのか。横暴はどのようにして終わったのか。14:5 主が悪者の杖と、支配者の笏とを折られたのだ。14:6 彼は憤って、国々の民を打ち、絶え間なく打ち、怒って、国々を容赦なくしいたげて支配したのだが。

主がバビロンに苦しみを与えることによって、バビロンに苦しめられていた人には安息が与えられます。先ほど読んだテサロニケ第二1章にあった言葉に、「あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え」とあったとおりです。大患難というのは、この地上に下る大いなる神の怒りの

日であり、恐ろしいことであると同時に、神を敬う者たちにとっては神を敬う者たちを困難にさせる、そのくびきを神が打ち砕かれる時でもあります。

14:7 全地は安らかにいこい、喜びの歌声をあげている。14:8 もみの木も、レバノンの杉も、あなたのことを喜んで、言う。『あなたが倒れ伏したので、もう、私たちを切る者は上って来ない。』

神の民のみが苦しみを受けたのではなく、自然界、被造物も苦しみを受けてきました。アッシリヤやバビロンのような大国は、他国に侵略する時に無意味にどンドン森の木々を倒していきました。その横暴さを示すために、暴力的になぎ倒していったのです。そこで神がバビロンを滅ぼされるといのは、こうした被造物の呻きにも応えられたということが出来ます。使徒パウロが、その点をローマ 8 章で説明しています。「8:21-22 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。」すばらしいですね、私たちの主が戻って来られると、私たちが贖われているだけでなく、この被造物も贖われます。被造物が、人も自然界も神の御心に従って、調和した世界になるのだということを教えてくれています。

2C 下界の陰府 9-11

14:9 下界のよみは、あなたの来るのを迎えようとざわめき、死者の霊たち、地のすべての指導者たちを揺り起こし、国々のすべての王を、その王座から立ち上がらせる。14:10 彼らはみな、あなたに告げて言う。『あなたもまた、私たちのように弱くされ、私たちに似た者になってしまった。』14:11 あなたの誇り、あなたの琴の音はよみに落とされ、あなたの下には、うじが敷かれ、虫けらが、あなたのおおいとなる。

バビロンの王は、自分が倒れて死ぬだけでは終わりません。死んだ後に、陰府に下ります。そこには、先に下っていった横暴な国々の王たちも下っていました。そこに、最後に彼らを従わせたバビロンの王も下ったのです。彼らは惨めな姿になっていますが、「おまえもまた、このように弱くなってしまったのだな。」と弱々しくあざ笑っている姿を描いています。そして、そこにはバビロンの栄華や美は何一つ残されていません。ヤコブの家が苦しみの後に安きを得たのとは異なり、彼は休むところがありません。寝床には蛆がおり、虫けらが多くことになります。

こうして、バビロンの王は死後に自分のしたことの報いを受けているのです。エゼキエル書にも、イスラエルの周囲にある国々の王たちが、死んだ後もそのまま死後に陰府に下っている姿を、ここイザヤが伝えているように生々しく伝えています(31 章、32 章)。聖書には「ヘブル 9:27 人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」とあります。自分のしたことについて、墓場まで持って行けば、後は野となれ山となれ、ではないのです。主は墓場の向こうまで、自分のしたことについて、その責任を追及されるのです。死後にも命があること、それを知らなければいけません。

3C ルシファー 12-15

こうして、預言は地上のことだけでなく、地の下のことにまで及んだので、バビロンの王の背後で動いていたサタン自身が地の底に落とされることを預言していきます。

14:12 暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしてあなたは地に切り倒されたのか。14:13 あなたは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。14:14 密雲の頂に上り、いと高さ方のように上ろう。』14:15 しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる。

午前礼拝で話しましたように、横暴な国々の動きの背後には「主権」とか「力」とか呼ばれる、墮落した天使の存在があることを知る必要があります。そして、その高ぶりや自惚れ、神から離れ自分で成し遂げたいという欲望、そうした背後に悪魔の姿があることを学びました。「神の星々のはるか上に」というのは、天使たちの上にとということです。そこに神の王座があります。「北の果ての会合」とありますが、預言者エゼキエルがバビロンにいた時に、同じように北からケルビムがやって来たことが書かれており、北の方角に主の御座からの栄光が降りる何かがあるようです。そして「密雲」は、神の栄光を示しています。彼らよりも優れたところいよう、という欲望、これがサタンを落とす原因となりました。

4C 投げ出される屍 16-23

14:16 あなたを見る者は、あなたを見つめ、あなたを見きわめる。『この者が、地を震わせ、王国を震え上がらせ、14:17 世界を荒野のようにし、町々を絶滅し、捕虜たちを家に帰さなかった者なのか。』14:18 すべての国の王たちはみな、おのおの自分の墓で、尊ばれて眠っている。14:19 しかし、あなたは、忌みきらわれる若枝のように墓の外に投げ出された。剣で刺し殺されて墓穴に下る者でおおわれ、踏みつけられるしかばねのようだ。14:20 あなたは墓の中で彼らとともにすることはない。あなたは自分の国を滅ぼし、自分の民を虐殺したからだ。悪を行なう者どもの子孫については永久に語られない。14:21 先祖の咎のゆえに、彼の子らのために、ほふり場を備えよ。彼らが立って地を占領し、世界の面を彼らの町々で満たさないためだ。』

場面は、死後の世界、霊の世界から地上に戻っています。バビロンの王が倒れましたが、彼の屍がそのまま野ざらしにされていることを預言しています。当時、人の尊厳はその人が生きている間だけでなく、その後にもどのように葬られるかというところまで及んでいました。古代の遺跡を見れば、それが良く分かります。ヨルダンにあるペトラは、ナバタイ人というアラブ系の貿易商人たちの国の首都でしたが、そこは数々の墓に囲まれた町であることが知られています。したがって、列王記や歴代誌には、一連のユダの王が民に敬われていたのかそうでなかったのかを示す物差しとして、どこに葬られているかの記述があります。

バビロンの王が、「あなたは、忌みきらわれる若枝のように墓の外に投げ出された。」とあります。

これだけ人々から忌み嫌われていたのです。興味深いことに、この「若枝」という言葉は、キリストご自身にも使われていました。エッセイの根株から新芽が出て若枝が伸びますが、そのようにキリストは小さきところから出て、そして世界を治められる王となります。しかしバビロンの王の若枝は忌み嫌われ、墓の外に投げ刺されます。そして、この王国が再び立たないために、彼の名が覚えられないよう、その子孫も受け継ぐことのないための処置を取ります。

14:22 「わたしは彼らに向かって立ち上がる。・・万軍の主の御告げ。・・わたしはバビロンからその名と、残りの者、および、後に生まれる子孫とを断ち滅ぼす。・・主の御告げ。・・14:23 わたしはこれを針ねずみの領地、水のある沢とし、滅びのほうきで一掃する。・・万軍の主の御告げ。・・」

これが永遠の滅びです。後に残るものを残させない。そして、そこには虚無のみを置く、ということです。救いについては、偽りの教えがあります。それは、滅びというのは永遠ではないというものです。死後に、救いのチャンスがあるというセカンド・チャンスというものがあります。そして、信じる者も信じない者も、究極的には全てが救われるとする万人救済説があります。しかし黙示録には、新しい天、新しい地があり、そこに神の住まわれる新しいエルサレムがあっても、そこに不信仰な者は入れないという但し書きが、二度も書かれています。どんなことがあっても、滅びと永遠の命は入り混じることがないということを示しています。

3B 打たれるアッシリヤ 24-32

こうして、バビロンに対する宣告をイザヤは終えます。ここで一気に、近未来におけるアッシリヤに対する宣告に移ります。終わりの日に起こることを伝え、それから同じように神が差し迫るアッシリヤに対しても行なってくれることを伝えていきます。遠い未来について約束しても、近い未来において同じ神がおられることを信じるのが大切です。ある人がいいましたが、「神が過去に、そして未来に奇蹟を行なわれることは信じているが、現在、奇蹟を行なわれることを信じているか？」ということです。「ヘブル 13:8 イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。」

1C 主のご計画 24-27

14:24 万軍の主は誓って仰せられた。「必ず、わたしの考えたとおりに事は成り、わたしの計ったとおりに成就する。14:25 わたしはアッシリヤをわたしの国で打ち破り、わたしの山で踏みつける。アッシリヤのくびきは彼らの上から除かれ、その重荷は彼らの肩から除かれる。14:26 これが、全地に対して立てられたはかりごと、これが、万国に対して伸ばされた御手。14:27 万軍の主が立てられたことを、だれが破りえよう。御手が伸ばされた。だれがそれを引き戻しえよう。」

主が遠い未来にバビロンに行われること、そして終わりの日に行われること、それをアッシリヤにも行なってくださいます。アッシリヤのくびきを除いてくださいます。そして、重荷をユダの民の肩から除いてくださいます。そして、このアッシリヤを倒す神のご計画が、全地に対して、万国に対して行なわれることだと言われます。つまり、世界中で覚えられるべき出来事にして、主こそが神で

あることを知らしめるものにする、ということです。

そして主がここで強調されているのは、「わたしの国で打ち破り、わたしの山で踏みつける。」ということです。アッシリヤは、ユダは自分のものだとしました。そしてエルサレム、そのシオンの山は自分のものだとしました。けれども、主は「これはわたしのもの」と宣言されています。主がご自分のものだと言っているものを、自分が貪るといふ過ちを人は犯します。

そしてもう一つ強調していることは、「必ず、わたしの考えたとおりに事は成り、わたしの計ったとおりに成就する。」ということです。27 節でも、「万軍の主が立てられたことを、だれが破りえよう。」とあります。なんとすばらしいことでしょうか、主はどんなことがあっても、ご自分が考えたとおりに事を行われます。ですから、立てられた計画に反対することほど、愚かなことはありません。相手を潰そうとしても、潰されるのは自分のほうです。ですから、私たちが神の立てられた希望と将来のご計画に、自分の身を委ねているか、明け渡しているかどうかが大事であります。

2C 殺されるペリシテ 28-32

14:28 アハズ王が死んだ年、この宣告があった。14:29 「喜ぶな、ペリシテの全土よ。おまえを打った杖が折られたからと言って。蛇の子孫からまむしが出、その子は飛びかける燃える蛇となるからだ。14:30 寄るべのない者たちの初子は養われ、貧しい者は安らかに伏す。しかし、わたしは、おまえの子孫を飢えて、死なせる。おまえの残りの者は殺される。14:31 門よ、泣きわめけ。町よ、叫べ。ペリシテの全土は、震えおののけ。北から煙が上がり、その編隊から抜ける者がいないからだ。

7章以降で、イザヤが預言していたアハズ王が死にました。時は紀元前715年のことです。アハズが死んだことを、「おまえを打った杖が折られたから」と言っています。ペリシテ人は、士師の時代にはサムソンとの戦いにあるように、イスラエルに対して優勢でした。サウルがペリシテ人と戦うことは多かったです。けれどもダビデを神は立てられ、そしてダビデ王国が確立されると、ペリシテ人は決定的な敗北を経験します。それ以降、二度とユダの国には歯向かえない、従属するしかないという状況でありました。けれども、アハズは主に背く王でした。他の周囲の民もそうでしたが、ペリシテもユダのシェフェラ地方のある町々に突入したりと、その弱体化したところを突いてきました(2歴代 28:18)。

ですから、アハズが死んだことによって、ダビデ王朝がさらに弱まったとペリシテ人は思い、喜びました。けれども、主はアハズによってユダの国を見捨てられていません。覚えていますか、主はアハズの過ちにも関わらず、インマヌエルの約束を与え、彼らがアッシリヤの手に陥らない約束を与えておられました。そして最後は、ダビデの子孫がペリシテに対して「燃える蛇」となって、ペリシテを倒してしまいます。アハズの子ヒゼキヤによって、ユダの国はアッシリヤから守られます。そして、究極的にはそこはイスラエルの支配する地となります(11:14)。ですから、アハズが倒れても、

主はその子孫から燃える蛇を送られるのです。

彼らの過ちは、「ユダが弱くされることを喜んでいる」ということです。人が倒れること、しかも主の選ばれた民が弱くされることを喜んでいますが、主は、このような見下しを喜ばれません。「ローマ 14:4 あなたはいついだけなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立てることができるからです。」主の立てられている人々を絶えず認めない姿、反抗し、批判し、そして自分はどの権威の中にも入らない姿、これはまさにペリシテ人の心と同じです。

ところで、アハズはアッシリヤに拠り頼んでいました。対してペリシテは、絶えずアッシリヤを刺激するような反抗的な態度を取っていました。734 年にはガテが貢を払うことを拒み、打ち負かされます。720 年には、エジプトに寄り添ったためアッシリヤがやって来て、ガテでエジプト軍と戦い、ガテとアシュケロンを占拠します。711 年には、アシュドテが他の周囲の国々と共に反乱軍を作りますが、失敗します。701 年には、セナケリブに対抗して彼の手の中に落ちます。それが、30-31 節に書かれている預言です。アッシリヤがエルサレムを包囲し、701 年に南進しますが、その前にセナケリブに反抗した彼らを襲った姿が 30-31 節に書かれています。興味深いことに、アッシリヤは寄る辺のない子や貧しい者は殺しませんでした、反抗する者たちだけを殺します。ここに、主のご計画があります。自分を高ぶらせる者だけが、主が裁かれる時に裁かれます。

14:32 異邦の使者たちに何と答えようか。『主はシオンの礎を据えられた。主の民の悩む者たちは、これに身を避ける。』』

ここは、ペリシテ人が、ヒゼキヤが王の時に、反アッシリヤ同盟を打診するために来たのでしょうか。その時に預言者イザヤは、その使者にこの言葉を伝えたのです。「主はシオンの礎を据えられた。主の民の悩む者たちは、これに身を避ける。」そうです、ペリシテ人は他の遠い国々比べたら、エルサレムにはとても近いところに住んでいます。彼らはここにこそ、主がおられて、この方が救い主であることを知ろうと思えば知ることができました。しかし、それを認めなかった。シオンにこそ、主が礎を置いておられるところです。そして次が大事ですが、「主の民の悩む者たち」とあります。貧しい者たちと訳すこともできるでしょう。霊的に貧しくされている、悩んでいる、けれども主にこそ希望があるとする者たちです。

私たちは、ペリシテ人のような者たちに囲まれたこの世に住んでいます。主に拠り頼み、従うという道ではない、姑息な人間的な解決方法に取り囲まれています。そのような提案を、周囲の人、自分のとても身近な人も助言するような複雑な環境にいます。アッシリヤのような脅威に対して、ただ祈ろう、御言葉を読もう、交わって互いに励まそうということではなく、横から「そうではない、こんな方法でいいのだよ。仲間にならないか。」と誘い込む、嫌な存在で囲まれています。それが人であったり、テレビから出てくる言葉であったり、過去に受けた教育であったり、そして純粋に自分の

心に語りかける声かもしれません。そして、いろいろな徒勞で終わるような思い煩い、無駄骨を折らせるのです。

しかし、私たちの救いはシオンにおられる主にあります。この方にただ心を開いて、心を注いで祈ればよいのです。この礎の石は、私たちの主イエス・キリストです。「1ペテロ2:4-6 **主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが、神の目には、選ばれた、尊い、生ける石です。あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。なぜなら、聖書にこうあるからです。「見よ。わたしはシオンに、選ばれた石、尊い礎石を置く。彼に信頼する者は、決して失望させられることがない。」**」人には捨てられた方、つまりユダヤ人の指導者に捨てられた、イエス・キリストです。この方が捨てられて、ローマの十字架に付けられました。しかし、ここにこそ救いの力があります。私たちを生かし、神に立ち上がり、命の道を歩む源泉があります。